

Title	＜書評＞Jeffrey A. Bell, Philosophy at the Edge of Chaos : Gilles Deleuze and the Philosophy of Difference
Author(s)	古川, 智彬
Citation	共生学ジャーナル. 2 p.141-p.148
Issue Date	2018-03
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70631">https://doi.org/10.18910/70631</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 書評

Jeffrey A. Bell

*Philosophy at the Edge of Chaos: Gilles Deleuze and the Philosophy of Difference*

University of Toronto Press, 2006, 292 頁

古川 智彬\*

Chiaki FURUKAWA

## 1. はじめに

本書の著者 Jeffrey A. Bell は、現在 Southeastern Louisiana University の哲学教授であり、ドゥルーズを始めとする現代フランス哲学の研究を行っている。彼は本書以外にもドゥルーズの研究書を出版しており、例えばドゥルーズにおけるヒュームを扱ったものや、ドゥルーズ晩年の著書『哲学とは何か』の入門書などがある。

本書の特徴としては、まずドゥルーズ哲学におけるスピノザとニーチェの影響を重視して解釈を行っているということを挙げることができる。とはいえ、これはドゥルーズの研究において珍しい方針というわけではない。本書を他の研究書と比べてみたとき、その最大の特徴の一つは、「カオスの縁の哲学」という観点から一貫してドゥルーズの様々な議論を読み解いていく点にこそあると考えられる。

本書は、第1部（「差異を思考する」）と第2部（「システムを再び思考する」）、および結論部（「カオスの縁における哲学」）とから成っている。第1部は五つの章から成っており、ドゥルーズがシステムを条件づける差異を、つまりはカオスを、どのように思考したのかということが論じられている。まず第1章でシステムと差異との関係をどのように思考するのかということについて、ヘーゲル、ニーチェ、デリダなどの議論に触れながら、それらとの比較をすることでドゥルーズの立場を大まかに明らかにしている。第2章および第3章では、（ドゥルーズによる）スピノザとニーチェについて論じながら、差異を思考するということにかんするドゥルーズの立場をより詳しく検討している。さらに第4章ではアリストテレスにかんするハイデ

---

\*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 (scar\_let215@yahoo.co.jp)

ガーとドゥルーズの解釈を、また第5章ではアルトーの「器官なき身体」にかんするデリダとドゥルーズの解釈をそれぞれ取り上げ、両者の違いを明らかにしている。第2部は第6章のみから成っており、この章では第1部で論じられた差異と共に思考されるべきシステムについて、主にホワイトヘッドとの比較を交えながら論じられている。

議論の全てを追うことはもちろん不可能であるから、以下ではまずドゥルーズのスピノザとニーチェを扱う第2章および第3章の内容を概観することで、ドゥルーズ哲学がカオスの縁の哲学であるとはどのようなことなのかを確認する。その後で、第4章以降で扱われるトピックの中から器官なき身体という概念を取り上げ、カオスの縁という観点からどのようにドゥルーズの議論が解釈されているのかを見ておきたい。

## 2. スピノザとニーチェ、カオスの縁の哲学

著者はスピノザにかんして、実体・属性・様態の三つ組についての議論をまずは取り上げ、そこにカオスの縁の哲学の基本的な構図を読み込んでいく。では著者は、ドゥルーズの解釈に基づきながら、これらをそれぞれどのようなものと考えているのか、そしてまた、三者の関係はどうなっているのだろうか<sup>(1)</sup>。

まず実体とは、絶対的に未規定でありながら自らを秩序づけていくような生成変化である。そして属性とは、こうした実体に内在している規定された秩序であり、諸様態とはこの秩序が規定され、同定可能なものになることを可能にするための条件に他ならない。これら三者の関係は、まず実体が規定可能であるためには属性のもとで把握されていなければならない、さらにその属性が規定可能であるためには属性がその現働化された様態によって知覚されていなければならない、というようになっている。属性が実体の本質として同定されるには、それが様態として現働化されていなければならない。だから実体は、前もって存在する同一的な存在では決してないのだと言える。そしてこのように生成変化(未規定なもの)と存在(規定されたもの)との関係を思考した点にこそ、ニーチェがスピノザを自らの先駆者と見なす理由があったと著者は述べている (Bell 2006:50)。

もう一つスピノザにかんして、有限な様態である人間が神の永遠な本質を認識するというについて行われた『エチカ』の議論が、著者によって取り上げられていることにも触れておきたい<sup>(2)</sup>。スピノザによれば、有限な精神は神を知ることができるし、精神の永遠な部分を増やすこともできる。このことが可能になるのは、有限で特異的なものが神の絶対的に未規定な力能と切り離せないものであると認識することによってである。さらに議論の詳細を追う余裕はないが、ここで重要なのは、特異的で有限なものを無限なものに関わらせるということが主題化されていることだけでなく、そうした無限なものを有限なものを抜きにして考えることはできないということも指摘されていることだろう。著者によればこうした主張はニーチェにも引き継がれている。そしてスピノザとニーチェに共通するこうした主張に、ドゥルーズもまた大きな関心を寄せていた (Bell 2006:61-62)。それゆえ、スピノザに次いでニーチェについての議論へ移りたい。

ニーチェにおいて、特異的で有限なものと無限なものに関わらせる試みとは、永遠回帰についての議論に他ならない。自らの特異的な生を肯定するためには、有限な自己と切り離すことのできない絶対的に未規定な生成変化の力能の肯定、すなわち永遠回帰が必要とされる。ここでもスピノザと同様に、有限で特異的なものと絶対的に未規定な力能とを関係させるということが主題化されていると同時に、無限なものは有限なものから切り離せないということも指摘されている。ところで、こうした絶対的に未規定な力能は、ニーチェにおいては(スピノザの神に対して)力能の意志であると言われている。力能の意志と永遠回帰について、もう少し詳しく見ておきたい。

まず力能の意志は、同定不可能な差異的要素であるとされる。そしてこれによって、諸々の力を同定することやそうした諸力の間の差異を評価することが可能になる。同定不可能である以上、力能の意志そのものは「自己矛盾的」である。そしてこれは、スピノザにおいて絶対的に未規定な生成変化である実体に対応している。しかし、生きていく上での「実践的な必要性」

(Bell 2006:77) から、こうした同定不可能なものを習慣的な同定可能なものにする必要が出てくる。つまり、カオスには秩序が課されなければならない(ここで課される秩序は、スピノザにおける実体に内在する秩序＝属性に対応している)。ゆえに、力能の意志は対照的な二つの方向へ向かうことになる。

一方で、力能の意志は自らの生成変化を否定し、その根本的な否定を単に繰り返すだけになってしまう。他方で、こうした否定的な方向と反対に、力能の意志は自らを肯定するという肯定的な方向もありうる。ただし、このような力能の意志の肯定は二重でなければならないとされる。どうしてだろうか。

力能の意志は、そもそも評価や肯定を可能にする条件であり同定不可能な生成変化であるのだから、それについての肯定は、別の肯定の対象となっていなければ、同定可能なもの（存在）として考えることはできない。ゆえに力能の意志の肯定が同定可能なものになるとときには、別の肯定によってそれが反復される必要がある（一つ目の肯定はディオニュソスの肯定、二つ目はアリアドネの肯定と呼ばれる）。とはいえ、それはあくまで差異的要素の反復、つまりは同定を絶えず逃れるものの反復であり、同定されてすでに存在していたものの反復、すなわち同じものの反復ではない。

こうした（ドゥルーズによって解釈された）ニーチェの議論を、著者はグレゴリー・ベイトソンの「ダブルバインド」についての議論を参照しながら、さらに説明している（Bell 2006:98-104）。ダブルバインドとは、相反する二つの要求に引き裂かれるような状態を指す。以下は著者がベイトソンから借りてきている例だが、バリ島の人々は口論において、秩序は必要である一方で強度も維持されなければならないというダブルバインドに直面して、口論を最終的な解決へは至らせずに、その対立を安定化させるという方法を採用。ベイトソンはこれを、「強度のプラトー」を創造することであるとやっている。ではニーチェが直面したダブルバインドとはどんなものだったのだろうか。

新しいものの創造にはあらかじめ存在しているのではない、同定不可能なカオスが不可欠であるが、カオスそのものを認識することはできない一方で、それを同じものの反復として秩序の中で完全に飼いならしてしまうこともやはり避けられなければならない。ニーチェが直面したのは、こうしたダブルバインドだった。カオスと秩序の必要性というダブルバインドに直面したとき、両者の関係はいかなるものであるべきかを考える必要が出てくるのであり、ニーチェが主張した永遠回帰とは、カオスと秩序との両方によって特徴づけられるような「動的システム」でなければならない。そして動的システムが作動しているカオスと秩序の間のこの領域こそが、「カオ

スの縁」と呼ばれる。

著者は、以上のようなニーチェについての議論を辿った後で、ドゥルーズの様々な場面における議論の中に、このカオスの縁という発想を見出している (Bell 2006:105-106)。例えば『意味の論理学』における「出来事」は、同じものの反復と狂気のカオスとの中間にあり、『千のプラトー』における存立平面は領土化されるが脱領土化されるからカオスの縁にあるとされる。さらには、『哲学とは何か』における哲学・芸術・科学は、カオスが秩序かというダブルバインドにそれぞれに固有の仕方に対処するものであることが指摘されている。つまり、哲学・芸術・科学はそれぞれの仕方、カオスを擁護すると同時にそれに抗するような「存立平面」を創造することを、自らの務めとしている。

以上のような例については、本書の第 3 章においてごく手短かに述べられているにすぎないが、これ以降の章ではより詳細な議論が行われている主題もある。以下ではそうした主題の例として、器官なき身体についての議論を取り上げておきたい。

### 3. 器官なき身体とカオスの縁

器官なき身体はもともとアントナン・アルトーに由来する概念であるが、この概念のドゥルーズによる解釈を説明するにあたって、著者はデリダによる器官なき身体の解釈と比較しながら論じている。以下でも両者の議論に触れながら、ドゥルーズとガタリにとっての器官なき身体とカオスの縁との関係について確認していく。

まずデリダによれば、アルトーの器官なき身体にかんする議論は、従来の形而上学を批判しようとしているものの、結局はそうした形而上学の伝統を繰り返す結果になってしまっているのだという。というのも、アルトーが器官なき身体を待望しているのは、失われた存在を再び獲得しようとすることに他ならないからだ。だからアルトーは、器官がある身体による組織化を逃れるために、差異化されていない純粋な現前としての器官なき身体を求めているのだとデリダは指摘する。

これに対してドゥルーズとガタリによれば、器官なき身体が再び獲得

されうるような、あらかじめ存在する実体であるとは考えられていない。それは、絶えず生産過程のうちで生産され続けていく。また器官なき身体は、差異化されていないものであると考えられることもない。これらのことを踏まえて器官なき身体は「奇妙な統一性」(Bell 2006:160)として理解される。こうした統一性とはすなわち、「地層化され、閉じられたシステム」を避けるとともに、「死をもたらず制御されていない過程へと統一性が陥ってしまうような癌のシステム、死のシステム」をも避けるような、「カオスの縁にあるシステム」である、と言われている (Bell 2006:165)。それは、超越的な〈一〉による統一性からも、全く統一を欠いたカオスからも、区別されなければならないような統一性なのだ。

以上のようにして、著者がドゥルーズのスピノザとニーチェの解釈に見出したカオスの縁の哲学という特徴は、ドゥルーズとガタリによる器官なき身体についての解釈においても見出されることになる。

## 4. おわりに

ここまで確認してきたように、著者はまずドゥルーズによるスピノザおよびニーチェの解釈に基づきながら、ドゥルーズ哲学を特徴づけるものとしてのカオスの縁の哲学がいかなるものであるかを明らかにした。そのうえで、著者はドゥルーズの哲学史研究の時期以降の議論についても、カオスの縁の哲学という観点から解釈を行った。ドゥルーズの仕事は一般的に、初期・中期・後期の三つの時期に区分されるが、本書においては、それら全ての時期の諸議論が扱われている<sup>(3)</sup>。つまり本書は、ドゥルーズの生涯を通じて見出すことのできるカオスの縁の哲学という特徴の観点から、ドゥルーズ哲学を解釈している。こうした解釈上の視座を提供してくれることは、読者にとって非常に有益なものであると言えるだろう。

また、こうしたドゥルーズ哲学に一貫している考え方を形容する際に、カオスの縁という言葉を用いていることの意義も指摘しておきたい。著者が幾度もスチュアート・カウフマンの著作を参照していることから明らかなであるが、カオスの縁という言葉は複雑系の科学の用語に他ならない。カウフマンはこの概念を用いて、生命の誕生や進化から社会や経済のシステム

に至るまでの様々な事象について、説明を行った<sup>(4)</sup>。これと同様に、著者も生命の誕生や惑星の形成などをカオスの縁の哲学であるドゥルーズ哲学の議論を用いて説明している（Bell 2006:215-216）。

評者には、こうした著者の試みが成功しているのか否かについて十分な判断を下すことはできない。ただ、議論が十分に展開されているとはいえない上に、哲学に科学の議論を安易に持ち込んでいるのではないかという疑念を拭い難いことも確かだろう。しかしこうした難点はあるものの、カオスの縁という言葉が用いられていることによって本書が、ドゥルーズ哲学とドゥルーズ自身が論じることのなかった科学的な諸議論とを突き合わせて論じるための土台になりうるとは言えるのではないだろうか。

いずれにせよ、本書を読むことで、ドゥルーズの生涯を貫いている考え方を捉えるための有効な視座となりうるカオスの縁の哲学について理解することができる。そしてこのことを踏まえて、今度は反対にドゥルーズの哲学における通時的な変化を読み取っていくことができるだろう。また本書において、ドゥルーズ哲学と生命の誕生や惑星の形成などといった科学的な諸議論とを併せて考察することが可能になっていることを確認しておいたが、このようにして理解された、カオスの縁の哲学としてのドゥルーズ哲学は、人間以外の様々なものとの共生を思考するにあたって、そうした思考の土台の一つになりうるのではないだろうか。

## 注

- (1) 以下で紹介するスピノザにかんする著者の議論は、当然ながら明らかにドゥルーズのスピノザ解釈に基づいている。ただし、スピノザの実体を同定不可能な生成変化、あるいはカオスと見なしている点は、少なくともドゥルーズの『スピノザと表現の問題』から明白に読み取れるとはいえないように思われる。以上のことを勘案すると、著者はドゥルーズのスピノザ解釈のなかに、カオスの縁の哲学を読み込んでいるように思われる。とはいえ、ドゥルーズに対するスピノザの影響が大きいこと、そしてそれがカオスの縁の哲学という考え方にも影響しているということは疑いえないだろう。
- (2) 『エチカ』が、『単論文』や『知性改善論』といったスピノザのそれ以前の著作と一線を画しているのは、こうした議論が「共通概念」という概念を導入して行われていることに存している。ドゥルーズは『スピノザ——実践の哲学』、とりわけその第5章において、こうしたスピノザの思想の展開について論じている。



- (3) ただし、後期に属するとされる著作の議論にかんしては、本稿でも触れた『哲学とは何か』に対する言及が少し見られるのみである。
- (4) カウフマン (2008) を参照。なお、「カオスの縁」という言葉については、特に第4章において、節を一つ設けて論じられている。

## 参考文献

Deleuze, Gilles 1969. *Logique de sens*. Minuit.

Deleuze, Gilles 1981. *Spinoza: Philosophie pratique*. Minuit.

Deleuze, Gilles et Guattari, Félix 1980 *Mille Plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*. Minuit.

Deleuze, Gilles et Guattari, Félix 1991 *Qu'est-ce que la Philosophie ?* Minuit.

カウフマン、スチュアート 2008 『自己組織化と進化の論理——宇宙を貫く複雑系の法則』 米沢 富美子監訳、筑摩書房。